

編集後記

本号は「上部消化管の出血」の特集で、一般臨床家の必読の要があろう。外国文献にもこのテーマで数多くの名著があるが、本邦は消化管疾患では特異な点があるので、その意味で極めて重要である。執筆者はその道での大家であり、今更言を要しない。しかし、本症状の患者に接して、その診療の方向づけを強いられると、はたとまどってしまうことも真実である。

症例の項では、真に血と汗との結晶のたまものであることを痛感し、頭が下がる思いである。

岡部治弥先生のプラハの記事は立派である。自分も7月4日(学会前日)にプラハ入りをし、13日プラハ発まで、数多くの不快さを味わった。第一はタクシーが、まずひろえない大都会。一寸考えても日本では、わからない。歐洲の学者は自家用できていた。その他の悪条件は数えあげればきりが無い。ルーマニア、ユーゴスラビアと比べて比較にならない状態だ。自分がプラハを出てから38日後にソ連が侵入したわけで、現在では当時と比べてさらに悪化しているだろう。しかし、あの状態が真の意味の共産圏だろう。われわれからみてよい共産圏はソ連からたえず白眼視され、何らかの圧迫をうけているわけであろう。学者は米、西欧の本も機械も買えず、病院も古いままであった。こんな意味で、日本の胃腸研究者は幸福であると思う。写真機やカラーフィルムも不足しているらしい。食事も特定以外の所ではよくない。このようなことから、現行の社会主義に批判を感じた。

「胃と腸」をさらに良くするために、読者の諸先生より多くの意見をよせられ、今後さらによいものにするために御尽力を頂きたく存じます。なお、これらの御意見の即時実行はプランや印刷技術面等の関係で多少遅れておりますが、号を追って改良しておりますので、御期待をこの次第です。

<青山大三>

<編集> 早期胃癌研究会

(担当) 石原・細田・小林